この人に聞く　首藤隆司さん

# 夜間定時制高校に教員として生きて

◆プロフィール

| | |
|---|---|
| 1936(昭和11)年 | 愛媛県西条市に生まれ３歳で父(国鉄職員)の転勤で香川県高松市に移住 |
| 1945(昭和20)年 | ７月高松市で空襲に遭う |
| 1951(昭和26)年 | 香川県立高松高校入学 |
| 1955(昭和30)年 | 東京教育大学国文科入学 |
| 1959(昭和34)年 | 新潟県立三条高校定時制教員として29年間勤続 |
| 1988(昭和63)年 | 新潟県立三条工業高校へ転勤 |
| 1996(平成８)年 | 同校を定年退職 |

編　集　部

## 私の生い立ち

昭和11（1936）年2月24日に愛媛県の西条市で生まれ、ちょうど2・26事件の2日前です。東京は雪が積もり、四国もあのとき雪が積もって、私のおしめが乾かなくて困ったと母がよく話をしていました。父が国鉄の職員で3歳で高松へ転勤、高松で昭和20年の7月4日に空襲に遭ったのです。高松は8割がた焼けてしまい、わが家も焼けてしまった。

家の近くに製紙工場の廃液を溜めている池があり、その池の臭い水の中にすでに浸かっていた人が布団を貸してくれ、母と妹と弟と4人で廃液にぬらして頭にかぶって、それで助かった。

父と母は文学好きで、父は安月給だったが夏目漱石全集とか芥川龍之介著作集などを揃え、小学3年生で「吾輩は猫である」「坊ちゃん」「羅生門」「鼻」「芋粥」などを、童話では宮沢賢治や小川未明などを読んだ。

小学校5年生のとき、担任の先生から「お前良い声をしているから歌え」といきなり学芸会に出させられて、そのとき歌ったのが「広瀬中佐」という文部省唱歌の軍歌です。「おれって歌が上手なのか」と、それ

から歌が大好きになって、ラジオを一度か二度聞くと歌を覚えてしまった。

中学2年生くらいでクラシックの熱烈なファンになり、シューベルトの歌曲をラジオで聞いて、楽譜を買ってきて一生懸命ドイツ語を耳で聞きながら読みを覚え、ドイツ語で歌っていたのです。大学に入ってから大学のうたごえコーラスに入部した。

## 定時制の教師の道を選んだ動機

昭和26年香川県立高松高校に入学し、3年生になっていよいよ進路をきめなくてはいけない。その頃は阿部次郎の「三太郎の日記」、西田幾多郎の「善の研究」などの哲学書を読む哲学少年でした。とにかく世の中悪い奴がいっぱいいる、自分の信念も曲げずに、悪事を絶対やらないで生きたいと思っていた。教師なら、出世を望まなければ自分の信念を守れるのではないか。憲法と真理を守りますといえば信念を貫けると考えた。

もう一つは、夕方図書室から帰る時、夜間定時制の生徒たちと先生が学校の食堂でうどんを食べながら、まるで友達みたいにおしゃべりしているのを見て、定時制の先生もなかなかいいものだな、と思った。

当時、宮沢賢治に憧れていて高校2年生の時から詩を書き始め、詩を一生書いていけたらいいなあ。詩と童話を書きながら夜は定時制の先生になろうと決めたのです。

そこで、学校の先生になるには東京教育大学がいいのではないか、当時どこの大学も国文科は古典の研究であった。しかし教育大の吉田精一先生は近代文学で、それでどうしても教育大学にいかなくてはならないと思い教育大を受けた。自分の教養を積んでその力で受けるのならいいけど大学受けるためだけの勉強するのは間違っていると考えていて、受験参考書だけで勉強するやり方をしなかった。そしたら見事に落ちた。その翌年1年間、昼間は「蛍雪時代」で夜は旺文社の受験講座をラジオで聞きながら勉強し、翌年はなんとか合格した。

## 大学時代ーマルクス・エンゲルスとの出会い

東京に出たら、いきなり三鷹事件で逮捕された竹内景助さんの最高裁の裁判、学生自治会の呼び掛けで傍聴に出かけた。裁判所のまわりは警官隊が固めて我々をよせつけない。我々は日比谷公園に追いやられ、そ

こで集会をもった、そのとき国家権力というものに気が付いた。そのあと砂川事件（昭和30～32・1955～1957年、東京都下砂川町で起こった、米軍立川基地拡張に反対する闘争）の支援にも出かけた。日本がアメリカに支配された現実を知った。それまで僕自身は観念的な哲学青年だった。

1年生の夏休みにマルクス・エンゲルス全集を読み始め、「共産党宣言」や「空想より科学」を読んだ。「ドイツイデオロギー」の前書きに、マルクスの「これまでの哲学者は世界を解釈してきたにすぎない。これからの哲学者は世界を変革する仕事がある」の一文を読んでガーンと頭を殴られた。ああこれだと思った。翌年先輩に共産党に入党を勧められ、だいぶ悩んだが入党を決意した。

## なぜ新潟の定時制の高校か

大学を卒業すると、同級生はみな東京に残る人、故郷に帰る人、はっきり分かれるが、私は全国どこでも行くつもりでいた。友人から全国どこでもいくのなら一緒に新潟に行かないかと誘われた。野尻湖発掘の計画があるとのことで新井高校の話があったが、その校長が転勤することになって、ダメになった。

そんな話を聞きつけて、私の担当の教授が、同級生の柏崎の校長を紹介してくれ、三条高校に空きがあるのが分かった。三条の校長に会いに来たら、「申し訳ないが1年間だけ定時制でがまんして翌年なったら必ず昼間にまわすから」という。定時制の先生になるために教育大を志望したのだというと、校長が「よし君に決めた」と、その場で定時制勤務が決まった。

当時は定時制への転勤希望者が少なく、私は転勤願を出さずずっと置いてほしい、と歴代の校長に言ってきた。ところが29年目に校長から呼ばれて「県教委から同じ学校に30年置くわけにはいかない。動いてもらってくれと指示された」と言われた。私をとる校長はいないだろうと考えていたが、となりの三条工業高校の田中要さんの紹介で、校長が「それはいい話だ、来てもらったら」という話になり三条工業へ転勤することになった。校長の後日談「生徒や父母に絶大な信頼がありましたからねえ。生徒指導にしろ、授業にしろ、すばらしい。生徒を本当に可愛がっていました。私は最高の人事をしたと、今でも誇りに思っているんです」（赤旗日曜版1996年5月5日）。

## 三条高校夜間定時制での教育
### ―人に教えることの喜び

小学校のときから学力遅進児だとか身体障害児であるとか、そういう子に私は惹かれるのです。相手も私のところによって来るのです。小学校6年生の時、班長にさせられて、担任がそういう子を私の班に入れるのです。そういう子のめんどう見てやる。割り算のできない子に、教えてやるとその子が割り算を一生懸命やるのを見て嬉しくてしょうがない、何か人に教えることがとても好きになり、喜びを感じる。だから母は「あんたのお友達は、服装の汚い子ばっかりだね」と笑っていました。

定時制の子どもたちに魅力を感じ、好きになるのです。ひとつは肌があうというか、なんかむこうも私と一緒にいると安心していられる。私自身もそういう子どもに取り囲まれていると安心していられる。

一番力を入れたのは「なぜ?」という好奇心を引き出すこと。勉強の仕方を教え、遅れた子には補習をし、全員卒業をめざすこと。いじめられるような弱い子や困っている子には一生懸命手をかける。生徒たちに民主的な感覚があって、こういうのは最肩だと思わないのです。

たばこを吸うなど非行を起こした子に、いく度もいく度も教えてもまた意に反することしてしまう、でも指導をし続けてきた。そんな生徒からの手紙に「私は離婚した父も母も許せません／夜中一人で考えていると、ついたばこに手が行くのです。／先生と誓いを破った自分に愛想が尽きてすべてがどうでも良くなってしまうのです」とあります（『生徒からの手紙』現代日本詩人叢書1983）。

言って聞かせるというものではない。理屈ではない。理屈で人間動くわけではない。やっぱり、こちらの気持ちが相手に通じた場合に初めてわかる。だから叱るのはもちろん叱るけれども、叱ったらわかるかというとそうではない。こっちの気持ちが相手に通じるというか、こんなふうに自分のことを見てくれている人がいる、こんなふうに自分のこと理解してくれる、あの人のことは聞かなくちゃ、つまり納得しなければ人間は変わらない。

ただそんなに私は努力したというわけではない。それが自然なのです。ほかの先生方の生徒に対する指導

は、ありきたりというか、生徒の悪口を言う。私はそういう気持ちには全然ならない。

よく、やめさせてくれとか、啖呵きって、やめてやるとか。それをなんとかつづけさせようと、学校をやめていくことには徹底的に反対をして、やめさせないよう精一杯力を注いだ。

ようやく卒業証書を手にした生徒は、「ほんとうにありがとうございました。本音をいうと私はどうでもよかったけど母が卒業証書を見たがって見せると、涙を見せました。『こんなもん、何の役にも立たん』といいながら、『それでも母が喜んでいる』と私も泣きたい気持ちでした」

## 子どもたちが主人公の学級通信が私の武器

毎週日曜日の午後にガリを切って月曜日には必ず学級通信を発行。それを親にも届け返信用のハガキを入れ投稿してもらっていた。その通信には、中学で登校拒否をし、家で荒れていた息子を定時制にいれた父親は、「……無気力、無感動、無関心の重症患者を高校に入れていただき早くも3年経ちました。1ヶ月で投げ出すものと独断と偏見をもっておりましたが、おかげさまで精勤賞をいただき仰天しております。これもひとえに先生のご努力によるものと深謝しております。悴ガンバレ後一息であるぞ」と。

そういう点では、非常にめずらしい、変な話ですが、とても恵まれた教員生活であったと思う。ほんとうに幸せな、いい時代だったと思う。こちらのやりたいようにやらせてくれたからね。がんじがらめの今はなかなか好きなようにできない。

こうして、教員生活を振り返り、生徒から学んだことは、「ぬるま湯のようなサラリーマン家庭に育った世間知らずの坊やが、生徒から日本の庶民の生活の厳しさ、そこを生きる知恵を教えられた。人間は命令では変わらず、自分が変わりたいと思うようになったら変わる、そのためには時間が必要で、教育者は待つ姿勢が大切。人間というもの、社会というものを生徒と関わることで学んだ。愛していれば、いつかこちらの気持ちは通じるという自信が持てた。『人間を学力で見る誤りを教えくれたり夜学生の笑顔』（歌集『生徒に学ぶ』近代文藝社刊、1991）と述懐する。

自分の選んだ短歌の作品（他は『首藤隆司歌集』・「わが卒業式」日本全国歌人叢書近代文藝社刊に収録）

アルファベット書けぬ生徒が旋盤の腕誇る時はじめて笑う

卒業の教室を飾る桜草の鉢一つ買いぬ雪の朝市

妊娠の噂ある生徒問い詰めずさりげなく渡す愛と性の本

教室に笑顔で入りたしドアの前顔確かめる一瞬を持つ

我今は平気で便器に手を浸けて吸い殻拾う教師となれり

企業見学終え帰りくる生徒らの現実を見し目の色深し

## 組合活動のことや退職後と今

三条工業高校へ転勤するまでずっと分会書記長を務めた。日刊職場新聞を毎日発行し、新聞「さんこう」を毎日配って要望を聞き、校長交渉で要求を実現させてきた。これで組合が大層信頼されて、「俺は右翼だ、共産党大嫌いだ」という柔道の先生が、「共産党は大嫌いだがお前のことは尊敬しているぞ」とすし屋に連れて行ってくれたりした。そのほか全国高等学校生活指導研究協議会（高生研）全国委員を依頼され、新潟県の高生研の会長も退職まで務める。

○河内イヨさんを支援する会の会長として

定年退職をした翌々年、河内イヨを支援する会の会長に推された。イヨさんは、三条高校定時制時代の教え子で、厚生連三条総合病院に助産師として勤務、1999年不当労働行為事件で病院を追われ、病院からの排除、組合活動を行わせない人権侵害を告発、損害賠償請求の訴訟を起こした。地労委、中労委、新潟地裁、東京高裁も職場復帰、賃金支払いを命令し、厚生連の訴えを棄却、全面勝利で職場復帰を勝ち取った。この間11年8ヶ月。日本の労働組合の弱さを、いやというほど見せつけられた。全国的な運動となり、途中会長は藤尾彰新潟大学名誉教授と交代し副会長になった。

○いま、三条短歌会の会長と長岡スマイル短歌会の指導。新潟詩人会議会員、それから燕三条FMラジオの番組「首藤隆司の童謡唱歌」で歌を歌っている。燕市発行の「文芸つばめ」の編集委員、見附市文芸祭の短歌部門の選者をやっています。もう22年になりますが「燕第九を楽しく歌おう会」というコーラスの会員になっています。グループホーム（軽度認知症者施設）で童謡唱歌を歌うボランティア、燕九条の会、燕原水協の会員です。

昨年（12月7日）、燕市立吉田南小学校から社会科の時間に、戦争体験の話を依頼された。約1時間にわたって小学校6年生の子どもたちに「戦時中の生活と空襲体験」の講話を行い、戦争の悲惨さや戦争中の食糧難による子どもたちの様子を語り、戦争は絶対してはいけないことを訴えた（ＤＶＤで保存、詳しくは首藤隆司著『夏休みに戦争が終わった』文芸社刊、２０１２年刊）。

（文責・内山）

## ジェンダーレス制服の選択制が始まる

運動好きの小学6年生の女子が、中学校へ行ったらスカートでなくスラックスでもいいことに、と区長に求めて、それがきっかけに東京・中野区ではそれが実現した。世田谷区も同様に、制服を選択できるようになった。この動きは、都内に広まるとみられている。

昨年、新設の千葉県柏市・柏の葉中学校は、男子用はブレザーにスラックス、ネクタイ、女子用にブレザー、スカート、スラックス、リボン、ネクタイを用意し、性別にこだわらずに選択できるようにした。

北九州市教委は、昨秋、ＬＧＢＴ（性的少数者）への配慮と制服の機能性向上を目的に、スラックスを含む「標準服」を導入して現行の制服も残し、生徒の希望に合わせて、選択できるようにして来年度から実施。

沖縄は、20年以上前から県立高校では事前に申し出を受けた場合は個別に制服選択を認めてきた。それが周知徹底されなかったが、那覇高校は、この3学期から事前申請なしで、スラックス、スカートを選ぶことが可能になった。全国各地でこのような動きは進むとみられる。新潟県は如何？

（吉）